

主に仕えるために救われた

2006. 11. 7 (火)
ベック兄メッセージ (メモ)

引用聖句

マタイの福音書 7章19節から23節

「良い実を結ばない木は、みな切り倒されて、火に投げ込まれます。こういうわけで、あなたがたは、実によって彼らを見分けることができます。わたしに向かって、『主よ、主よ。』と言う者がみな天の御国にはいるのではなく、天におられるわたしの父のみこころを行なう者がはいるのです。その日には、大ぜいの者がわたしに言うでしょう。『主よ、主よ。私たちはあなたの名によって預言をし、あなたの名によって悪霊を追い出し、あなたの名によって奇蹟をたくさん行なったではありませんか。』しかし、その時、わたしは彼らにこう宣告します。『わたしはあなたがたを全然知らない。不法をなす者ども。わたしから離れて行け。』」

マタイの福音書 25章14節から23節

「天の御国は、しもべたちを呼んで、自分の財産を預け、旅に出て行く人のようです。彼は、おのおのその能力に応じて、ひとりには五タラント、ひとりには二タラント、もうひとりには一タラントを渡し、それから旅に出かけた。五タラント預かった者は、すぐ行って、それで商売をして、さらに五タラントもうけた。同様に、二タラント預かった者も、さらに二タラントもうけた。ところが、一タラント預かった者は、出て行くと、地を掘って、その主人の金を隠した。さて、よほどたってから、しもべたちの主人が帰って来て、彼らと清算をした。すると、五タラント預かった者が来て、もう五タラント差し出して言った。『ご主人さま。私に五タラント預けてくださいましたが、ご覧ください。私はさらに五タラントもうけました。』その主人は彼に言った。『よくやった。良い忠実なしもべだ。あなたは、わずかな物に忠実だったから、私はあなたにたくさんの物を任せよう。主人の喜びをともに喜んでくれ。』二タラントの者も来て言った。『ご主人さま。私は二タラント預かりましたが、ご覧ください。さらに二タラントもうけました。』その主人は彼に言った。『よくやった。良い忠実なしもべだ。あなたは、わずかな物に忠実だったから、私はあなたにたくさんの物を任せよう。主人の喜びをともに喜んでくれ。』」

今までにアイドリゲンまで行った兄弟姉妹はたくさんいますが、おそらく新しい建物しか見て来なかったと思います。その新しい建物を建てる以前には、古い建物があったのです。たぶん七十何年ぐらい前に建てられたものです。その一部には創設者の部屋もありました。創設者はドイツの有名な将軍の娘だったのです。将軍については、ドイツの兵隊で、彼を知らない者はおそらく一人もいなかったと思います。彼の目的は、兵隊に福音を宣べ伝えることでした。兵隊のために日々一つのみことばを選んで、簡単な説明をつけて

渡したのです。何十年間もそれを行なったのです。将軍は召される前に、まだ若かった娘を呼んで、「あなたは女性だけれど、兵隊たちのためにこの仕事を続けてもらいたい」と。その結果は、彼等だけではなく、他の女性たちも聞く耳を持つようになって、アイドリッゲンのムッターハウスが出来たのです。

この創設者の部屋に大きな字で書かれていることばは、「主に仕えるために救われた」と。昔のアイドリッゲン・ムッターハウスの精神とは、それだったのです。

救われることは大切ですが、それだけでは十分ではありません。「主はどうして私たちを救ってくださったのか」、「どうして私たちは主の所有物となったのか」と言いますと、それは「主の器となるため」です。「用いられるため」です。

主に仕えるために救われたとなれば、「大変だ。奉仕しなくては…」ということではありません。主に仕えることこそ最高の特権です。私たちは将来の新しい世界で、いつまでも主に仕えることができる特権をいただいたのです。

さて、この奉仕のための備えとは、いったい何でしょうか。

司会の兄弟は二箇所読みました。最後の25章22節、23節をもう一度読みましょう。
マタイの福音書 25章22節、23節

「二タラントの者も来て言った。『ご主人さま。私は二タラント預かりましたが、ご覧ください。さらに二タラントもうけました。』その主人は彼に言った。『よくやった。良い忠実なしもべだ。あなたは、わずかな物に忠実だったから、私はあなたにたくさん物を任せよう。主人の喜びをともに喜んでくれ。』」

主イエス様からこのようなおことばを聞きたいものです。しかし、7章のことばは聞きたくありませんね。

マタイの福音書 7章22節、23節

「その日には、大ぜいの者が私に言うでしょう。『主よ、主よ。私たちはあなたの名によって預言をし、あなたの名によって悪霊を追い出し、あなたの名によって奇蹟をたくさん行なったではありませんか。』しかし、その時、わたしは彼らにこう宣告します。『わたしはあなたがたを全然知らない。不法をなす者ども。わたしから離れて行け。』」

「ある者」と書いてあれば分かるのですが、ここでは、「大ぜいの者」と記されています。

「預言」とは、つまり、みことばを宣べ伝えることなのです。

パウロは、エペソ書6章21節の中で、ある兄弟について次のように書いたのです。
エペソ人への手紙 6章21節後半

主にあって愛する兄弟であり、忠実な奉仕者であるテキコが…

この箇所を読むとはっきり分かります。すなわち、「イエス様に仕える」と言いながら、目的を自らに置き、この世的な方法をもって主に仕える奉仕者がいるということが現実に存在しているということです。

聖書を読むと、イエス様のみ名によって病をいやし、悪霊を追い出した人たちに対し、イエス様は、「良い忠実なしもべだ。よくやった」とはおっしゃらないで、「不法をなす者ども。わたしから離れて行け」と、明確に指摘されている記述があります。

イエス様にとって大切なことは、私たちがどれだけ多く、何と何をすることではなく、「どんな動機」で、「どんな力」で、ご奉仕をするかということです。

みなさんは、「ゼロ」という数をご存知でしょう。寒暖計を見ると、ゼロはプラスとマイナスを分けている数字です。聖書の中で言うゼロは、「十字架」（死と甦り）なのです。

十字架は、主に仕える者の奉仕が一時的であるか、または、永遠に続くかを決めます。主に仕えるしもべが、「十字架」を自分のものとして体験していればしているほど、そのご奉仕は永遠に実を結ぶものとなるはずです。

ですから、奉仕者にとって大切なことは、どれだけ「十字架」を体験しているか、また、「十字架」に対するその人の心の態度が問題なのです。「イエス様の十字架の死」は、私たちにとって何を意味しているのでしょうか。

キリスト者にとって一番大切な信仰の内容が記されているのは、ローマ書です。

例えば、ローマ書の6章は、罪の力が打ち砕かれ、私たちの古き人はイエス様とともに十字架につけられたことを教えています。この事実を心の目で見たととき、私たちは、主にすべてをゆだね、明け渡し、イエス様に仕えていこうと決心しますが、そのように決心して主に仕えていくうちに、それらはすべて自らの力ではできないという、ローマ書7章の体験にぶつかるのです。

ローマ書7章を通して教えられることは、「自らの力で主に仕えることはできない。主自ら聖霊が私たちのうちに、また私たちを通してお働きになるのでなければ、そのご奉仕はむなしい」ということです。

しかしここまで体験したとしても、主に仕える奉仕の準備が全く整ったとは言えません。次の三つのことについて、いっしょに考えてみたいと思います。

第一番目。たましいの中における戦いについて。

第二番目。理想的な学校とは、どういうものなのでしょうか。

第三番目。奉仕の秘密とは、いったい何でしょうか。

「たましいの中における戦い」、「理想的な学校」、「奉仕の秘密」。

*第一番目。第一に必要なことは、たましいの中に戦いを感じなければならないことです。

イエス様でさえも、たましいの中の戦いをお感じになりました。イエス様はいつも父のみこころをなそうとなさいました。イエス様ご自身はご自分の意志をお持ちでしたけれど、父のみこころの上にご自分をお立てになることなく、いつも「我が心ではなく、あなたのみこころを成させてください」との心の態度をもって、地上の生涯を全うなさいました。

イエス様は荒野で悪魔に試みられましたが、悪魔は、いわゆる殺人姦淫というような大きな罪でイエス様を誘惑しませんでした。父のみこころを無視して勝手に何かをさせようと、イエス様を試みたのでした。しかしそれは成功しませんでした。どうしてでしょうか。

ヨハネ伝 5章 19節に、その答えが書かれています。

ヨハネの福音書 5章 19節

「子は、…自分からは何事も行なうことができません。」

「子」とは、イエス様です。これはイエス様の心からの証しでした。「わたしは、自分からは何事もすることができません」と、イエス様ご自身が語っておいでになりますが、これこそイエス様の実り多い奉仕の秘訣そのものでした。

これを知識として理解し、行なうだけでは十分ではありません。イエス様が、私たちの弱い点に一つ一つ御手を触れてくださり、「これはあなた自身から出たものであり、わたしから出たものではない。これは改めなければならない」と教えてくださらなければなりません。

私たちは、「自らの真相」を知ることが必要です。何が肉的であり、何が霊的であるかを見分けることが必要です。これを見分けるためには、「上から来る光」による以外にはありません。

聖書を読むと、主によって用いられた奉仕者がたくさんいます。

- ・イザヤは、この「光」にあった時、叫んだのです。「わざわいなるかな。私は滅びるばかりだ」と。

- ・エゼキエルについては、

エゼキエル書 1章 28節

その方の回りにある輝きのさまは、雨の日の雲の間にある虹のようであり、それは主の栄光のように見えた。私はこれを見て、ひれ伏した。

と書かれています。

- ・ダニエルについては、

ダニエル書 10章 8節

私は、ひとり残って、この大きな幻を見たが、私は、うちから力が抜け、顔の輝きもうせ、力を失った。

と記されています。

- ・ペテロについては、

ルカの福音書 22章 61節、62節

主が振り向いてペテロを見つめられた。ペテロは、「きょう、鶏が鳴くまでに、あなたは、三度わたしを知らないと言う。」と言われた主のおことばを思い出した。彼は、外に出て、激しく泣いた。

- ・パウロが主にお会いしたとき、「彼は地に倒れた」と使徒行伝に書かれています。

- ・ヨハネはイエス様にお会いしたとき、「その足元に倒れて死人のようになった」と黙示録に書いてあります。

もし、イエス様が私たちの「心の目」を開いてくださらなければ、私たちは自らがどんなにみじめな者であり、あわれな者であり、憎むべき者であるか知ることができません。主のことばは「光」であって、全てを明るみに出し、主に逆らう全てのものを焼き尽くしてくださいます。

「十字架」の働きにより、私たちは、主に全く拠り頼む者となりたいものです。「わたしは、自分からは何事も行なうことができません」とイエス様はおっしゃられました。私たちはイエス様の御形に似る者とされたいものです。ただそうなることによるのみ、イエス様は、私たちを、「まことの弟子」と呼んでくださるでしょう。

しかし、そうなるまでに「たましいの中における戦い」が続きます。

ペテロが、一つのよい例ではないでしょうか。イエス様はペテロに向かって、「バルヨナ・シモン。あなたは幸いです。このことをあなたに明らかに示したのは人間ではなく、天にいますわたしの父です。(マタイの福音書 16 : 17)」と御声をかけられましたが、それからあまり経たないうちに、イエス様はこの同じペテロに、「サタンよ、引き下がれ。わたしの邪魔をする者だ」と激しいお叱りのことばを發しておいでになります。

悪魔は、どのようにしてペテロの心を犯したのでしょうか。また悪魔は、どのようにして私たちにその力をふるうのでしょうか。私たちが「自ら自分を支配しているか」、または、「御霊によって支配していただいているか」によって、悪魔の力が及ぶか及ばないかが決まります。

もし私たちが自らを「たましいの支配」にゆだねているなら、全てのことが自らの興味のために、自らの利益のために、自らの満足のためになされていることになり、この世のものを土台にして動いていることになります。

このような歩みをするなら、私たちはペテロと同じように十字架に向かわれるイエス様を止めて、イエス様からお叱りを受けるようなことをし続けなければならないでしょう。

もし御霊が私たちに支配しておられるなら、私たちの全てはイエス様の興味、イエス様の喜び給うことだけを思うようになるはずです。

主の喜び給うこと、主が心に留めておいでになることは、「十字架」です。この「十字架」を通してのみ、イエス様はご自分のご目的を達成することがおできになるのです。十字架から離れ、世と妥協することは、悪魔のいざないです。

ペテロは、自分の興味、自分の思いを通そうとしました。ペテロは悪魔と結び付く者になっていました。これは私たちに何を教えるかと言いますと、ペテロは自らに頼り、イエス様に全く拠り頼んでいなかったことを教えています。ペテロは、「たとえ死ぬようなことがあっても、私はあなたを否まない」とイエス様に言いました。

「自らに頼る」ということは、「悪魔に結び付く」ことを意味しています。「私は死んでもよいからイエス様に仕える」と決心してご奉仕しますが、後に「主の光」に照らされるとき、それが自らの力でなされた奉仕であったことに気付きます。

*第二番目。「理想的な学校」について、考えたいと思います。イエス様に仕える者のための理想的な学校とは、いったいどういうものなのでしょうか。

自分のため、自分の興味のため、自分の意志からご奉仕することをやめ、全てを主にゆだねて事をなすような者に、造り変えていただくところでなければならないでしょう。

ピリピ人への手紙3章を読むと、パウロは生まれながら素晴らしい学問や能力を持っていましたが、イエス様の学校に入り、コリント第一の手紙2章のような、「まことの奉仕者」として備えなければならないものを備える者に造り変えられました。読んでみましょう。
コリント人への手紙・第一 2章2節、3節

なぜなら私は、あなたがたの間で、イエス・キリスト、すなわち十字架につけられた方のほかは、何も知らないことに決心したからです。あなたがたといっしょにいたときの私は、弱く、恐れおののいていました。

「…私は、弱く、恐れおののいていた」。

今ここで、ちょっと四つのみことばを見てみたいと思うのです。これを見ると、私たちのたましいの働きが分かります。そして、イエス様は自分勝手な生活から免れる方法は、ただ、私たちは日々、自分の十字架を負って歩むことによる以外にないと教えています。

前に、私たちの古き人はイエス様とともに十字架につけられてしまったことを述べましたが、私たちはこれを信仰によって自分のものとして受け取り、これに感謝しなければならないことを話しました。

けれど、今ここで問題にしているのは、私たちの古き人ではなく、生まれながらの人、生まれながらの能力を言っているのであり、私たちは古き人から解放されなければなりません。次のみことばがそれをよく表わしています。例えばヘブル書、一文章だけです。

ヘブル人への手紙 10章39節

私たちは、恐れ退いて滅びる者ではなく、信じていのちを保つ者です。

ペテロの手紙・第一 1章9節

これは、信仰の結果である、たましいの救いを得ているからです。

「たましいの救い」。

ルカの福音書 21章19節

あなたがたは、忍耐によって、自分のいのちを勝ち取ることができます。

ここで言っていることは、「私たちのたましいは古き人と同じように死ななければならないのではなく、救われなければならないのであり、絶えず御霊の支配のもとにななければならない」と言っているのです。

四つのみことばを、ちょっと見てみましょう。

主の弟子となるために、主に用いられる器となるために、何が必要なのでしょうか。

① マタイ伝の10章です。34節から読みます。

マタイの福音書 10章34節から39節

「わたしが来たのは地に平和をもたらすためだと思っはなりません。わたしは、平和をもたらすために来たのではなく、剣をもたらすために来たのです。なぜなら、わたしは人をその父に、娘をその母に、嫁をそのしゅうとめに逆らわせるために来たからです。さらに、家族の者がその人の敵となります。わたしよりも父や母を愛する者は、わたしにふさわしい者ではありません。また、わたしよりも息子や娘を愛する者は、わたしにふさわしい者ではありません。自分の十字架を負ってわたしについて来ない者は、わたしにふさわしい者ではありません。自分のいのちを自分のものとした者はそれを失い、わたしのために自分のいのちを失った者は、それを自分のものとしてします。」

このみことばで、イエス様は、「ご自分のあとに従う者は十字架の道を歩むのだ」と教えておいでになります。自らの興味、自らの思い、自らの満足は、そこにはもはや少しの場も占めていません。

マタイの福音書 10章39節

「自分のいのちを自分のものとした者はそれを失い、わたしのために自分のいのちを失った者は、それを自分のものとしてします。」

このみことばの中に、「自分のいのち」（自分のたましい、考えていること、思っていること、感じていること）を失った者は、それを自分のものとする、と書いてありますが、「いのちを失った者」とは、「自らの願い、自らの思いを『十字架』によって切り捨てている者」という意味です。

もし、私たちが、「まことのいのち」を失っている者であるなら、御霊は、私たちに「十字架の意味」と、「十字架の道」へと導き出してください。いわゆる「平和」、また「妥協」によって生まれたお互いの間の一致は、何の役にも立ちません。私たちが、イエス様にふさわしい者であるかどうか問題です。

② 第二番目の箇所は、

マルコの福音書 8章32節から35節

しかも、はっきりとこの事がらを話された。するとペテロは、イエスをわきにお連れして、いさめ始めた。しかし、イエスは振り向いて、弟子たちを見ながら、ペテロをしかって言われた。「下がれ。サタン。あなたは神のことを思わないで、人のことを思っている。」それから、イエスは群衆を弟子たちといっしょに呼び寄せて、彼らに言われた。「だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負い、そしてわたしについて来なさい。いのちを救おうと思う者はそれを失い、わたしと福音とのためにいのちを失う者はそれを救うのです。」

「イエスは振り向いて、弟子たちを見ながら」、(ペテロだけではなく) 弟子たちを見ながら、言われました。

イエス様がこれから大きな苦しみを受け、十字架に架かるために出発なさろうとしたとき、ペテロは、イエス様を自分の考えでいさめました。ペテロは、イエス様がいのちをお捨てになることを、望まなかったのです。

私たちは、「自分のいのち」「自分の意志」を、イエス様に明け渡そうとしない、このペテロに似た者ではないでしょうか。ペテロはイエス様に、「どうか自分のいのちを大切にしてください」といさめました。

しかし、イエス様の心は、「自分の興味、自分の思い、自分の満足」を求めておいでになりませんでした。イエス様は、「ただ父のみこころだけ」を思っておいでになられたのです。

イエス様は、
マルコの福音書 8章34節、35節

それから、イエスは群衆を弟子たちといっしょに呼び寄せて、彼らに言われた。「だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負い、そしてわたしについて来なさい。いのちを救おうと思う者はそれを失い、わたしと福音のためにはいのちを失う者はそれを救うのです。」

「だれでもわたしについて来たいと思うなら、です。ついて来たくなければそれでもいいのです」と。

私たちはどうでしょうか。「主のみこころ」を求めているでしょうか。私たちは「主のみこころ」を行なうことだけを望んでいるでしょうか。また、「主のみこころを愛している」でしょうか。

私たちは、主のみこころを行ないたいとしばしば考えますが、主のみむねを行なうのに「みこころ」への愛が伴いません。主の喜び給うこと以外は何ものも欲しくない者になりたいものです。

ペテロは、「イエス様のため」と思ったのですが、主の目からご覧になると、それは不純なものに見えたのです。なぜなら、ペテロは主のみこころを半分、自分の心を半分考えていたからです。ですからイエス様は、ペテロがイエス様を愛してそのように言ったこともお分かりになりながら、「サタンよ。下がれ」と厳しくお叱りになったのでした。

③ 第三番目のみことばは、ルカ伝です。ルカ伝17章29節からお読みいたします。
ルカの福音書 17章29節から35節

「ロトがソドムから出て行くと、その日に、火と硫黄が天から降って、すべての人を滅ぼしてしまいました。人の子の現われる日にも、全くそのとおりです。その日には、屋上にいる者は家に家財があっても、取り出しに降りてはいけません。同じように、畑にいる者も家に帰ってはいけません。ロトの妻を思い出さない。自分のいのちを救おうと努める者はそれを失い、それを失う者はいのちを保ちます。あなたがたに言いますが、その夜、同じ寝台で男がふたり寝ていると、ひとりを取られ、他のひとり残されます。女がふたりいっしょに白をひいていると、ひとりを取られ、他のひとり残されます。」

「自分のいのち」とは、「自分のたましい」です。

ここでイエス様は、ご自分の再臨の時を語っておいでになりますが、イエス様が再臨なさる時代はロトの時代のようだ、と語っておいでになります。ロトと家族は、罪深い町ソドムとゴモラが滅ぼされた時、そこから助け出されました。「再臨の時も同じである」と、イエス様は語っておいでになります。聖書は、「ある者は残され、ある者は取られる」と告げています。

けれども、ここでイエス様は、注意しなければならないことを述べておいでになります。
ルカの福音書 17章32節

「ロトの妻を思い出さない。」

なぜ、イエス様はこのように言われたのでしょうか。

ルカの福音書 17章33節

「自分のいのちを救おうと努める者はそれを失い、それを失う者はいのちを保ちます。」

ロトの妻は信者であったにも関わらず、この世のことを思い、後ろを振り返ったために塩の柱になりました。私たちは、主に携え上げられるのを楽しみにしているのでしょうか。イエス様の喜び給うこと、また、イエス様のみこころが私たちの生活の中で第一の場所を占めているのでしょうか。

ここに、「ある者は残され、ある者は取られる」と記されていますが、このことばは真剣に考えなければならないみことばです。イエス様はこのために、私たちがどのようにして備えをしていなければならないかを教えておいでになります。

マタイ伝の24章42節。イエス様は、次のように言われました。

マタイの福音書 24章42節

「だから、目をさましていなさい。あなたがたは、自分の主がいつ来られるか、知らないからです。」

「…知らないから、目をさましていなさい」と。意識してイエス様に従わず、イエス様のみこころに反して未信者と結婚し、地上の生活のことを思い、自らのために自らの力でご奉仕をしている信者は、イエス様の再臨に対する備えができていると言えるかどうか、疑問です。

私たちにとってイエス様がすべてであるなら、イエス様の再臨に際しての備えができていると言えます。もし、地上生活のことばかりを思い、自分のことだけを思っているなら、ロトの妻と同じ運命に陥るでしょう。

主からいただいた賜物が、「主より高い位置を占めている」のでしょうか。また、私たちの奉仕が、「主ご自身より高い位置を占めている」のでしょうか。

これは、大切な質問です。つまり、私たちが自らの力で生きているのか、または、御霊だけによって生きているのかをはっきりさせる質問です。

私たちは、あらゆる事から（人間関係、状況）から十字架を通して解き放され、「主と、主に関する事だけ」に結ばれているのでしょうか。もしそうでなければ、イエス様の再臨は私たちにとって喜ばしいものではなく、恐ろしいものと感じるに違いありません。

パウロは、主にある兄弟姉妹のために戦い、兄弟姉妹を愛し、次のように書いたのです。コリント第二の手紙 11章2節です。パウロの気持ちとは、心構えとは、どういうものであるか、この2節を読むと分かります。

コリント人への手紙・第二 11章2節

私は神の熱心をもって、熱心にあなたがたのことを思っているからです。私はあなたがたを、清純な処女として、ひとりの人の花嫁に定め、キリストにささげることにしたからです。

結婚の前に、花嫁がほかの男を愛しているなら、花婿は決して快く思わないでしょう。私たち救われた者ひとりひとは十字架を担い、イエス様がおいでになる時、ともに喜び合うことのできる者になりたいものです。

④ 最後に第四番目のことば、ヨハネ伝です。ヨハネ伝の12章24節、25節。

ヨハネの福音書 12章24節、25節

「まことに、まことに、あなたがたに告げます。一粒の麦がもし地に落ちて死ななければ、それは一つのみです。しかし、もし死ねば、豊かな実を結びます。自分のいのちを愛する者はそれを失い、この世でそのいのちを憎む者はそれを保って永遠のいのちに至るのです。」

「いのち」とは、「たましい」です。「自分のいのちを愛する者はそれを失い」と書かれています。原語では、この「いのち」は、「たましい」という意味になっています。「たましい」とは、自らの興味、自らの意志、自らの思いを意味しているのです。

「一粒の麦」は、イエス様の御姿を表わしています。麦の粒は、いのちを宿していますが、もし地に落ちて死ななければ、いのちが現われ実を結ぶことができません。同じように、イエス様は、永遠のいのちを持っておられましたが、もし十字架の死がなければ、麦の粒と同じようにそのままだったはずですが。

イエス様は、私たちの罪のためだけではなく、「多くの実を結ぶため」ご自分のいのちを分け与え、広めるために死なれたのです。

パウロはこのために、イエス様の死のさまと等しくなり、たましいを死に渡し、自らのうちにイエス様のいのちが現われるようにと、心から祈ったのです。彼の告白はコリント第二の手紙の4章に書かれています。これは経験から出た告白です。

コリント人への手紙・第二 4章11節、12節

私たち生きている者は、イエスのために絶えず死に渡されていますが、それは、イエスのいのちが私たちの死ぬべき肉体において明らかに示されるためなのです。こうして、死は私たちのうちに働き、いのちはあなたがたのうちに働くのです。

これこそ、実り多い奉仕、まことの奉仕の秘訣です。もちろん、新しく生まれ変わった者は、永遠のいのちを内に宿しています。

しかし、どうしてサタンに打ち負かされて勝利のない、喜びのない兄弟姉妹がいるのでしょうか。それは、私たちのうちに宿している「イエス様のいのち」が、自らのたましいの働きにより、自らの興味、意志によって、ちょうど麦の殻が麦の実を包んでいるように押し込まれ、殺されてしまっているからです。

イエス様の弟子たちを見てみましょう。

ヤコブとヨハネは、主に従わない町を見て、天から火をもってその町を焼き尽くすようにイエス様に願いました。ペテロは、「死んでも私はイエス様を拒まない」と自らに頼り、豪語しました。ほかの弟子たちは、お互いに言い争い、だれが一番偉いかと論争しました。

しかし、彼らが「十字架」を知り、よみがえられたイエス様に会い、また聖霊を受けた時、この聖霊によって全く違った人に変えられたのです。その結果は、彼らが自己に死に、愛に満たされ、忍耐深く、謙遜で、恐れを持たなくなっていました。彼らにとって知恵や名誉や自らの影響、成功、人気などは、問題でなくなりました。彼らは、岩のように堅い自我から解き放たれ、御霊に導かれる生活に入ってしまったのです。

二つの点について、以上「たましいの中の戦い」、それから「理想的な学校」について考えたのです。

*第三番目。最後に「奉仕の秘訣」について考えたいと思うのです。

なぜなら、これこそ大切なことだからです。どうして、信じる者の間に大きな開きがあるのでしょうか。

ある兄弟姉妹は、自分のことだけを考え、また、ある兄弟姉妹は、イエス様に喜ばれるにはどうしたら良いかと心を用いています。

ある兄弟姉妹は、何の喜びもなく無理に聖書を読みます。またある兄弟姉妹は、みことばから喜びと力がいただけるので、喜びをもってみことばを読み、食べています。

自分のことばかり考えていた伝道者が、後になって、どうしてあのように変わったのでしょうか。またある弟子たちは、本当に変えられました。どうして変わったかと言いますと、「十字架」を担って、自らをそこにつけたからです。

マルコ伝 8章34節です。これは、弟子たちの生活を変えた秘訣そのものです。
マルコの福音書 8章34節後半

「だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負い、そしてわたしについて来なさい。」

自分の十字架を負わず、立場や名誉や人気を考えている人たちは、イエス様のみこころ

にかなわず、イエス様はそのような人たちに、「おまえはわたしにふさわしくない」とおっしゃるのです。または、これらの人たちに、イエス様は、「わたしの弟子となることはできない」ともおっしゃるのです。

思いのままの生活が日々十字架につけられ、イエス様のいのちが私たちの生活を通して現われなければなりません。

これを知るために、三つの例話をあげて終わりたいと思います。

① 第一番目。旧約聖書になります。民数記から読みます。

民数記 17章1節から11節

主はモーセに告げて仰せられた。「イスラエル人に告げて、彼らから、杖を、父の家ごとに一本ずつ、彼らの父祖の家のすべての族長から十二本の杖を、取れ。その杖におのおの名を書きしるさなければならない。レビの杖にはアロンの名を書かななければならない。彼らの父祖の家のかしらにそれぞれ一本の杖とするから。あなたはそれらを、会見の天幕の中のわたしがそこであなたがたに会うあかしの箱の前に置け。わたしが選ぶ人の杖は芽を出す。こうしてイスラエル人があなたがたに向かってつぶやく不平をわたし自身が静めよう。」モーセがイスラエル人にこのように告げたので、彼らの族長たちはみな、父祖の家ごとに、族長ひとりに一本ずつの杖、十二本を彼に渡した。アロンの杖も彼らの杖の中にあつた。モーセはそれらの杖を、あかしの天幕の中の主の前に置いた。その翌日、モーセはあかしの天幕にはいって行った。すると見よ、レビの家のためのアロンの杖が芽をふき、つぼみを出し、花をつけ、アーモンドの実を結んでいた。モーセがその杖をみな、主の前から、すべてのイスラエル人のところに持って来たので、彼らは見分けて、おのおの自分の杖を取った。主はモーセに言われた。「アロンの杖をあかしの箱の前に戻して、逆らう者どもへの戒めのため、しるしとせよ。彼らのわたしに対する不平を全くなくして、彼らが死ぬことのないように。」モーセはそうした。主が命じられたとおりにした。

アロンは本当に主から召し出されたのか、アロンのなす奉仕は、まことの奉仕であるかどうか、疑われていました。主は、だれが召しにかなうまことの奉仕者であるか否かを示すために、十二本の杖を取り、各種族に配りました。すると、アロンの杖から芽が出、つぼみを出し、花が咲き、実が実り、アロンこそ、まことの召し出されたしもべであることが明らかになりました。一晩中、杖は真っ暗なところにあり、人目につかないところがありました。翌日見てみると、みごとに芽が出、実が実っていました。

私たちの奉仕も、真っ暗な死とよみがえりの経験を通して初めて、主に認められるまことの奉仕者となることができます。

② 二番目の例は、たびたび見てきたペテロです。

初めペテロは、自らに抛り頼み、「私は死ぬようなことがあってもあなたを拒みません」と言いました。ペテロはまた、自らの力をふるって兵隊の耳を切り落としましたが、主はこのようなしもべを用いることはおできになりません。

ペテロは暗いところを通らされなければならなかったのです。自分が否んだイエス様は十字架につけられて死んでしまわれました。それからの三日間、ペテロは深い絶望と暗闇の中に落とされました。この忘れることのできない三日間の体験が、後のペテロの奉仕に重大な影響を与えたのです。

③ 最後は、ヤコブの例です。

イサクの子どもであるヤコブは、主に仕えようと願っていましたが、まだ自分の好みを持っていました。ヤコブは、主のみこころをなそうとしましたが、まだ自らの力を用いていました。この自らの力は砕かれなければなりません。この状態はヤコブ自身には満足を与えていませんでした。

彼は叫んだのです。「私を祝福してくださなければ、あなたを去らせません」と。これは実に激しい戦いであり、これによって彼は自らの力で歩むことができない身とさせられました。その時以来、欺く者という意味のヤコブの名は変えられ、神が戦うという意味のイスラエルという名に変えられました。戦いのあと、ヤコブは歩きましたが、腰の骨が外れ、変わったさまになっていました。すなわち、自らの力が砕かれたのです。

私たちも、そのところまで進んで行かなければなりません。その時には、自らに頼るいっさいのものが無くなります。そうやって初めて、私たちは何をなすにも主に拠り頼んでするようになります。証しをするにも、人を導こうとするにも、自らの力に拠り頼まず、ただ、イエス様が私たちを通してお働きになる奉仕だけが、永遠の実を結ぶことを知る者となります。

私たちは、すでに自らを厭い、自らに頼ることがいかに恐ろしいものであるかを知っているのでしょうか。私たちの思いと主のみ思い、私たちの興味と主のご目的、これらの心の中における戦いは、生涯私たちにつきまとうでしょう。

私たちは生まれながら、自分にばかり心を配る性質を持っているので、イエス様は、私たちに自分の力がどんなにむなしいかを悟らせるために、訓練の学校へと私たちを導いてくださるのです。

私たちも、パウロのように言うことができれば幸いです。
ピリピ人への手紙 3章3節前半

神の御霊によって礼拝をし、キリスト・イエスを誇り、人間的なものを頼みにしない私たち…

このように言うことができたら、本当に幸いです。

私たちはこの「霊的な奉仕の備え」を主からいただき、イエス様のしもべとなることができたら、本当に幸いです。

了